

編集後記

今年の大会は2007年大阪以来の関西での開催となりました。開催地である京都大学宇治おうぼくプラザは、JRなどの駅から徒歩5分ぐらいと便利なだけでなく、国際会議なみのとても素晴らしい講演会場でした。大会実行委員長の跡見晴幸先生並びに関係者の皆様はこの場をお借りして感謝申し上げます。また学会賞、奨励賞を受賞された先生方、そしてポスター賞を獲得した皆さん、改めておめでとうございます。今回の大会時に開催された本学会理事会で本誌編集委員会委員の交代が承認されました。会員の皆さまに報告するとともに、今後とも本誌発展にご協力をよろしくお願いいたします。

さて、昨年の芥川賞で素直な受賞の喜びを語られた円城塔さんは東北大、東大院で物理学を専攻していた研究者であったことは、ご存知の会員の皆さまもおられるかと思います。週刊誌のインタビュー記事によれば、円城さんはお金に困り、原稿料を稼ぐのが小説を執筆する動機の一つだったそうです。受賞されるまでは存じ上げなかったのですが、2008年に日本物理学会誌に「ポストドクからポストポストドクへ」というポストドクの不遇、不安定さなどがつづられています。最近の文部科学省の発表ではいわゆるポストドクは約1万5,000人おり、博士余りの状態が続いています。円城さんは母親から「お前が研究者をやめてくれて心底ホッとした」と言われたそうですが、若い人が博士課程に進学しなくなることは明らかに日本にとって損失です。以前の小欄でもこれからの日本の科学・技術を担う若手研究者の待遇などについて書かせていただきましたが、産官学が協働して考えていかなければ、と切に思います。

ところで、本号の編集集中に読売新聞で「大学の實力」調査結果が公表されました。40項目以上の多岐にわたる調査で、会員の皆さまの中には回答作成に携わった先生もおられるかもしれません。基礎学力づくりの項目では習熟度授業やオリジナル教材の有無など、小学生と見間違えるような内容で、「實力」というよりも「状況」といった印象です。マスコミなどにこれらの項目で「實力」を比較されてしまう大学の先生方の教育と研究の両立の難しさをひしひしと感じました。このような評価がヒッグス粒子の様に大学の自由な研究のスピード感を妨げなければいいのですが。

環境バイオテクノロジー学会誌編集委員長 岩崎 一弘